

例旨

○蔽は必ず明に由る。塞は必ず通に由る。一一の態、然らざるを得ず。蓋し夫れ人の生爲る、必ず習する所に染む。習する所に染まれば、則ち其の素なる所を失す。是を以て、俗習の蔽は、學之が砭鍼を爲す。學習の蔽は、殆ど藥石を擲つ。之を染むるや易し。之を素にするや難し。之を蔽うや易し。之を復するや難し。夫れ因循薰蒸の久しき、猶お臭人の其の臭の臭とせず、屠人の其の羶を羶とせざるがごとし。髪を數え毛を簡ぶ。説の精微ならざるに非ず。天を超え地を越ゆ。教の廣大ならざるに非ず。惟だ各其の得て有する所を徳とし、其の由て行なう所を道とす。珠を拾いて玉を遺し、珮珠を惡んで瓊瑤を棄つ。異同紛縕。一護一訐。各おの其の門に據り。各其の戸を守る。區域を相い畫して、是非互いに殊なり。是に於てか、或いは相い睨視し、或いは相い仇讐す。學習の人の聰明を蔽い、人の才力を病ましむる所以なり。善惡之を擇び、是非之を折る。聖人に非ざる自りは、則ち得失無きこと能わず。擇びて審かならず。將に紫を以て朱を亂さんとす。惡みて學ばず、將に瞽を以て相を忌まんすとす。學びて黨せず。思うて偏ならず。則を獲て履む。斯れ道なり。我れ其の及ぶ可からざるを知ると雖も、而も射の拙なるを以て鵠を廢せんや。晉は垂髻より、触るる所總て疑わし。解く者、耳を咻しくすと雖も、語りて徵無し。竊に夢寐の語と爲す。思うて偏なるなり。以て無權の衡と爲す。故に人の言に曰く、火は易なり、故に熱す。水は會なり、故に寒すと。晉は則ち以爲らく。易なる者、奚爲れぞ熱す、會なる者、奚爲れぞ寒すと。人の言に曰く。易は輕くして升る、會は重くして降ると。人の思うや、此に至りて止む。晉の疑うや、是に於て已甚し。隆然として烏き者、何爲れぞ視る、邃乎として谷なる者、何爲れぞ聽く。目は何爲れぞ聽かざる、耳は何爲れぞ視ざると。人は則ち是に至りて釋つ。晉は則ち釋つること能わず。己の得て有する所を得て而して之を

有せざる者をば之を非とす。己の由て行なう所に由て而して之を行わざる者をば之を外にす。人は則ち是に於て能く斷ず。晉は則ち惑う。人は諸を古に聞きて、諸を書に得て便ち言う。晉は則ち未だ全信すること能わず。天地に於けるや、荒唐散漫として説く。生死に於けるや、恍惚曖昧として言う。験を僻に取り、舌を空に懸く。人は則ち意に介せず。晉は則ち憚然たること能わず。反復して之を思い、沈潜して之を繹ぬ。俯仰の間に小窺有るに似る。竟に自量せず。此に斯の述有り。蓋し斯の述は、一一の條理に由り、以て則を天地に取る。則ち敢えて古と計校せず。造語は己に由ること有り。一氣は會易なり。大物は天地なり。世に方圓と曰う。此に直圓と曰う。世に日月と曰う。此に日影と曰う。或いは其の名を命ずるや新たに、或いは其の義を取るや殊なり。惟だ天地と合するを求めて、而して定説を顧みるに暇あらず。惟だ冀う、人の習する所に病まず、以て向う所に活し、而して之を是非するに天地を以てし、之を取捨するに天地を以てすることを。其の門を護り、其の戸を守り、區域を畫し、而して是非の塗を殊にし、以て他の賢哲を禦ぎ、而して此の赤子を外にせざらんことを。故に儻し此の語を讀まんと欲する者は、専ら舊見聞に証し、専ら古訓話に據らば、則ち晉の罪を獲ること、亦た多からんとす。

○其の書は四冊。曰く本宗、曰く天冊、曰く地冊、曰く小冊なり。本宗は一冊。他の三冊は、兩兩を分つ。本宗の一冊は、鬱淳の神、混沌の物を語る。擧て之を斯の中に有す。然り而して物の若く立する所は、則ち神の若く活するを以てなり。神の若く活する所は、則ち物の若く立するを以てなり。立する者は物を露す。活する者は物を没す。没は天を爲す。露は地を爲す。天冊は則ち其れ鬱淳。故に鬱淳として活する者、擧げて此に繋がる。地冊は則ち其れ混沌。故に混沌として立する者、擧げて此に繋がる。條理は粲然として相判ると雖も。而れども没を説きて露に入り、露を説きて没に入る者は、混成して罅縫を没すればなり。含めば則ち開く。開けば則ち含む。故に鬱淳の神、混沌の物、已に一に開く。神は天地を開きて、會易は網縊す。故に大は廻ち能く小を容れ、小は廻ち能く大に居る。大は廻ち能く給し、小は廻ち能く資る。故に小より大を觀れば、則ち容るる者居る者、各自

に勢を張る。故に小より佗を觀れば、則ち佗は則ち大なり。大は能く小を統べ、小は能く大を散ず。大なる者は窮む可からず。小は盡す可からず。夫れ人なる者は、萬物中の一物なり。心なる者は、衆神中の一神なり。我遂に其の境を開けば、則ち鬱淳混淪、皆な我が境に給す。故に人を以て小を統べ、我を擧げて佗を措く。是れ之を我が小冊と爲す。是に於てか、本宗は天地の兩冊を包む。我が爲に大冊と爲す。大は給せざる所無く、小は資らざる所無し。故に小冊は、活する者を以て人部と爲す。立する者を以て物部と爲す。物部なる者は、大小を分別する者。便ち我が地冊なり。人部なる者は、天人を分別する者。便ち我が天冊なり。天地は則ち一宇宙なり。宙の經通を説けば、則ち序に先後有り。宇の緯塞を説けば、則ち言に先後無し。故に天冊は、部を活立に分ち、地冊は、部を没露に分つ。天冊は、其の一は廻ち活部、天と神となり。其の一は廻ち立部、神と本となり。地冊は、其の一は廻ち没部、通塞を説く。其の一は廻ち露部、覆載を説く。小冊。露を物にし没を人にするは、大を分ち天を分つを以てなり。故に將に斯の語を讀まんと欲する者は、流れに沂ると、流れに沿うと、左よりすると、右よりすると、中より提ると、端より起ると、猶お環の手の触るる所に從いて起きて轉ずるが如し。之を次序するが若きは、則ち本宗に統有り。鬱淳は能く活す。混淪は能く物す。人は小境を開きて、亦た天と勢を張る。蓋し人は如し天地に達觀せんと欲せば、但だ天に觀て、而して之を天に獲、人に觀て、而して之を人に獲んことを要す。書と圖とは共に贅疣なり。姑く魚兔の爲に筌蹄を設くるのみ。故に此の書を讀む者、天に觀て而して天に合う有らば、則ち其れ取れ。天に觀て而して天に合う有らば、則ち其れ舍け。晉は焉ぞ敢て與らん。

○物は經緯を有す。諸を文辭に寓するに、經は先後に由て序す可く、緯は兩辭齋發す可からず。氣は混繁を有す。諸を圖畫に託するに、繁は條理に由て分つ可く、混は罅縫綻開す可からず。故に文は變化に錯綜し、圖は條理に整齋す。夫れ物は統散の分有り。一天地を具するに於ては、則ち小猶お大なり。故に大物は、一は二を有す、二は一を成す。性物剖對し、往くさき限り無し。諸を一塵埃に置き、諸を一秋毫に求むるも、亦た猶お同じきなり。

爰に圖書を爲して以て彷彿を求む。蓋し大物は、天に於てすれば、則ち天統べざる無し。地に於てすれば、則ち地統べざる無し。往く所皆な然り。斯の語を讀む者、天を言えば則ち之を徒らに天にし、地を言えば則ち之を徒らに地にし、指すに従いて之を徒らにするは、能く玄を讀む者に非ざるなり。是を以て、圓を玩んで直を遺し、表を觀て裏を忘るるは、能く圓を玩ぶ者に非ざるなり。讀みて一聲を得れば、須く性物を剖對して、一天地の此に成るを觀るべし。重ねて一聲を得るに及んでも、亦た須く性物を剖對し、一天地を此に成し、以て其の祭を得、以て其の混を得る。故に一事一際、一物一境、己れ其の境に入りて、而して天地を其の境に盡くす。是を以て、甲を擧げれば、乙丙丁、皆な來りて甲に繋かる。乙を擧げれば、甲丙丁、皆な來りて乙に繋かる。丙丁自り、戊己壬癸、往く所皆な然り。是の故に、機に居るや、則ち天地は皆な機なり。體に居るや、則ち天地は皆な體なり。此の如くにして而して後、精麁相い得て、統散偏全、相い融す。一事一際、萬物萬境、言語を以て之を盡くさんと欲せば、則ち啻に蠡を以て海を測るのみならず。且つ言に統散有り、反比有り。先後の序す可き有り、次序を用いざる有り。専ら其の主を指す有り、一を擧げて萬を例する有り。専ら其の主を指すとは何ぞ。體を以て物を露すれば、則ち截然として其の物を殊にす。故に其の天を説き地を説き、水を説き火を説くが如きは、専ら其の主を執る。一を擧げて萬を例するとは何ぞ。性を以て氣を見ず者は、混然として萬物を融す。故に其の徳と曰い道と曰い、性と曰い才と曰うが如きは、混として萬物に融す。言語の道、譬諭有り。譬諭とは、彼を假りて此を曉すの術なり。一を擧げて萬を例するとは、假るに非ざれば則ち比喻に非ず。故に其の言に曰く、之を某に言うにと。又た曰く、之を某に移すにと。故に露を説く者は、多くは専ら其の主を指す。没を説く者は、多くは一を擧げて佗を例す。蓋し混成祭立、天地の態然り。是に於て、其の言は、上統べて下剖く者有り。偶を待たずして直ちに下なる者有り。句中、自から對する者有り。章を隔てて相い對する者有り。辭は對して意の汎なる者有り。主は對して辭の汎なる者有り。對に反有り、比有り、互有り、汎有り。彼此相い證する者有り。審かにせざ

れば則ち將に失せんと。是れ斯の語の文法なり。圖に直圓有り、大小有り、大圓は混成に擬し、小直は粲立に擬す。大直は剖析を爲し、小圓は對待を列す。文に反合有り。圖に表裏有り。文に剖對有り、圖に雙岐有り、是れ圖の大意、書に合する有る者なり。噫、夫れ、華を畫いて妙麗を極むるも、而も復た子を含まず。鳥を刻んで彷彿を致すも、豈に其の睨腕を爲さんや。是に於て、天巧は人に假さず。人巧は天に肖ず。獲る所は則ち魚兔。設くる所は則ち筌蹄なり。

○塊塊たり。洋洋たり。往くとして氣に匪ざる靡く、往くとして物に匪ざる靡きなり。物は見る可し。而して氣は則ち漠然たり。漠然として見難し。故に其の粲然も亦た之を知り易からず。氣に精麤有り。麤を察して以て精に漸む。行く者の始めて塗に上る所なり。蓋し人は塊洋網縊の間に坐して、之を視て見えず。之を聽いて聞こえず。これに触れて礙げざる者を觀て、或いは以て空と爲し、或いは以て無と爲す。夫れ未だ條理を知らざれば、觀て空無と爲す。亦た宜ならずや。蓋し會易の態は、物を反して居を同す。故に充と空と成り。無と有と成す。故に其の所謂空なる者は、體に空にして、而して氣に空ならず。其の所謂無なる者は、質に無にして、而して氣に無ならず。試みに水注を製するを觀よ。必ず二孔を穿つ。一孔は氣を通じて、一孔は水を通ず。一勺の水出づれば、一勺の氣を納る。水盡きれば則ち氣充つ。氣出でざれば則ち水入らず。故に地ならざる者は、皆な天なり。質ならざる者は、皆な氣なり。已に質と相拒みて、而して相居らず。水は門戸を以て出入りすれば、則ち氣も亦た門戸を以て出入りす。既已に空無ならば、豈に門戸を以てするを爲さんや。已に門戸に由ること有り。已に物と居を争う。嚴然として充ちて且つ有る者に非ずや。充ちて有ると雖も、而も闐として聲臭無し。是れ猶ち氣の謂なり。而して物と我と、亦た斯の中に遊ぶ。而して鳥獸の居る所は、魚鼈居らず。彼れ此れに來れば輒ち死す。此れ彼れに之けば輒ち死す。此れを以て彼れを觀、彼れを以て此れを觀る。反して能く同す。我は此の中に在り。試みに繩一條を執りて之を垂るに、壓することも無く援かるることも無くして、而して直下正立す。此の氣の直

なるを觀る。試みに革囊の鞠を以て。氣を内に充たして、外出の罅縫を塞げば、則ち千鈞以て之を壓すと雖も、
 而も墊らず。此の氣の持するを觀る。囊破るれば、則ち爆然として風を爲す。以て風なる者は此の氣の動なる
 を知る。風を隔つれば、則ち煦煦たるを覺ゆ。以て溫なる者の此の氣の靜なるを知る。物は水に入らば則ち湿る。
 此に在らば則ち燥く。故に名を命じて燥と曰う。其の水と相拒むを觀る。則ち氣と雖も體有り。體有る者は、
 處を得て居る。今、此れ質に空なりと雖も、而も空を以て體を成すなり。夫れ已に其の處を得て居る。已に物と
 其の處を争えば、則ち氣も亦た物なるのみ。物は氣に非ざる莫し。氣は物に非ざる莫し。是に於て、氣は散を以
 て體を虚す。體無きに非ざるなり。物は氣を以て實を結ぶ。氣ならざるに非ざるなり。前の見る可きの體なる者
 は體なり。漠然たる者は精體なり。麤を知りて精を知らず。詎んぞ物を知るに在らん。其の未だ物を知らざる。
 詎んぞ氣を知るに在らん。氣、麤なれば則ち體露す。氣、精なれば則ち體没す。没して鬱淳の神を爲す者は、徳
 性なり。成りて混沌の體を露す者は天地なり。露する者は會なり。没する者は易なり。會易に先後無し。没を擧
 ぐれば、則ち露 従う。露を擧ぐれば、則ち没 従う。讀む者、拈るに從いて必ず先後を序せざれ。且つ没を説
 けば則ち露に入り、露を説けば則ち没に入る。諸を祭立混成の間に求めよ。

○夫れ人は蜉蝣の年を以て、眇として天地に處して、視聽の廣からざるに病み、應接の徧からざるに苦しむ。苟く
 も之を審察熟體するに弗ずんば、則ち猶お破鏡の物の全形を照すこと能わず、擊火の物の全體を察すること能わ
 ざるがごとし。蓋し世は穎悟に乏しからざると雖も、而も未だ能く天地の以て然る所を審かにすること能わず。
 天地の偏半を見て、以て全體と爲す。垠洋の綱縷を見て、以て空無と爲す。蓋し天地は、混圓たる其の形、虚實
 其の中に於て物す。今や世は、實測と推歩と漸く精しければ、則ち其の形を知るに於る頗る熟す。其の形に頗る
 熟すと雖も、而も未だ能く天地の以て然る所を審かにせざる者は何ぞや。會易の故に罔きを以てなり。夫れ會易
 なる者は、對待の一一なり。人は其れ孰れか其の一斑を窺わざらん。未だ其の全體を見ざるなり。已に其の一斑

を窺いて、而も未だ其の全體を見ざる者は何ぞや。未だ條理の歸する所を得ざればなり。已に條理の歸する所を得る。四肢百骸。其の統ぶる所を得る。而して其の分るる所を知る。刀を奏むること駭然として、肯綮自から分る。族の爲し難きに至ると雖も、而も視ること止み、行くこと遅く、諫然として解く。

○一なる者は會易なり。之を條理と爲す。氣物分れ、性體合す。故に合する者は、分中に合す。而して氣は則ち

會易なり。物は則ち天地なり。往くとして會易天地に匪ざる靡し。人は口を開けば、則ち皆な會易天地と曰う。

未だ條理を知らず。何を以てか會易天地を知らん。於戲、尚しいかな。庖犧氏の後、我れ未だ能く會易を述ぶる

者を見ず。蓋し之を知るの道有り。未だ其の道を得ずして、強いて之を知らんと欲すは、猶お瞽者の文采を思想

し、聾者の律呂を思想するがごとし。終に思想する所を以て、之が言と爲す。之を窺竅と謂う。瞽聾は人を欺き、

窺竅の説、政を天下に爲す。窺竅は、五家を魁と爲す。五行は、洪範より以來、數千百年なり。汗牛充棟の書は、

皆な之が羽翼を爲せば、則ち、因循薰蒸、何ぞ臭人の臭、屠人の羶と異ならん。然りと雖も、彼れ微を天地に失

すれば、則ち仰觀俯察の久しきも、疑を生ぜざること能わず。是に於て、世に稍や五家の妄を議する者有り。妄

を知りて未だ眞に遇ず。焉んぞ燭を夜行に乗るに在らんや。條理なる者は、一一なり。分れて反す。合して一な

り。是を以て、反觀合一、微に正に依る。私を以て調停す可きに非ざるなり。夫れ人なる者は、有意を以て、能

く知り能く思う。天なる者は、無意を以て、能く爲し能く成る。是れ亦た其の反なり。先達は心を推して物を觀、

終に心の爲に私せらる。美なりと雖も善なりと雖も、天地の本然に非ず。況んや美と善とに非ざるをや。夫れ反

觀合一、試みに剪刀を執りて、紙を裁して之を觀よ。一拗一突、一傾一欹、之を合すれば則ち混一無間なり。天

虚地實、氣動物靜、火熱氷寒、雲升雨降、往くとして然らざる者無し。反觀して合一すれば、則ち窺竅の罅漏、

自から拵うこと能わず。故に博洽なりと雖も、聡明なりと雖も、反觀の門より來らざる者は、則ち之を堂に上せ

ず。噫、窺竅の繇る所、己を推して己に同じからざる者を窺うことに癩る。夫れ天なる者は、人に反する者なり。

人を推して天を窺う。是に於て、天人混ず。其れ天地を譚ずる者は、二と言うも亦た合す、三と言うも亦た合す、四と言うも亦た合す、五と言うも亦た合す。有無眞妄、惟だ辨の雄なる者勝つ。故に天人の辨は、學者の急務なり。未だ天人を辨せずして、安んぞ瞽聾と聰明とを分たん。人は苟くも事物を辨ずるに志し有らば、須く先ず此より始むべきなり。

○物なる者は、體を成して而して立す。故に條理井然たり。事なる者は、動きて相い交る。故に運爲紛若たり。條理井然たりと雖も、而も運爲紛若の中に在れば、古人終に條理の原を探窮すること能わざる者は、運爲變錯、目、之が爲に眩するなり。此の故に斯の書の文は、物に於ては、條理整齋に務め、事に於ては、運爲變錯に出づ。苟くも事に斯に従わんと欲せば、讀中、須く先ず辨ずべし。此れや天、此れや人、此れや事、此れや物なりと。而して後に以て始めて斯の語を讀む可し。

○聲は名なり。主は實なり。主は天なり。聲は人なり。人を以て天を呼ぶ。或いは相い稱い、或いは相い乖く。或いは、聲は異にして、主は同なり。或いは聲は同にして主は異なり。故に一一の各も亦た會易なり。天地の性も亦た會易なり。經緯も亦た天地なり。没露も亦た天地なり。日影を分つも亦た氣象なり。日影を合し、而して虚動に對するも亦た氣象なり。水燥を分つも亦た氣質なり。水燥を合し、而して實靜に對するも亦た氣質なり。水火も亦た象質なり。天地も亦た象質なり。生化の化も亦た化と曰う。化生の化も亦た化と曰う。精靈の精も亦た精と曰う。精力の精も亦た精と曰う。精麁の精も亦た精と曰う。精乳の精も亦た精と曰う。歳運の運も亦た運と曰う。運轉の運も亦た運と曰う。知運の運も亦た運と曰う。運輸の運も亦た運と曰う。噓喻の喻も亦た噓と曰う。噓吐の喻も亦た噓と曰う。故に外轉内持も亦た轉持と曰う。横轉堅持も亦た轉持と曰う。噓喻よりする者も亦た發收と曰う。鬱肅よりする者も亦た發收と曰う。出納する者も亦た食吐と曰う。含開する者も亦た食吐と曰う。露中、持に對して轉と謂えば、則ち東西を合して之を轉と謂う。運に對して轉と

謂いえば、則すなわち象しやうに屬ぞくする者もの運うんす。氣きに屬ぞくする者もの轉てんず。没ぼつ中ちゆう、晝ちゆう夜や冬とう夏かを以もつてする者ものを轉てんと爲なせば、則すなわち古今ここん終しゆう始しを以もつてする者ものを運うんと爲なす。意い爲いの意いは、則すなわち心性しんせいを兼かぬ。意い知ちの意いは、則すなわち心しんを分わかつ。是これ聲せい同おなじくして主しゆ異ことなるなり。一いちと曰いひ、倉いん易ようと曰いひ、氣き物ぶつと曰いひ、天てん地ちと曰いひ、睡すい覺かくと曰いひ、寤ご寐びと曰いひ、營えい爲いと曰いひ、營えい施しと曰いひ。是これ差さ別べつ無なきに非あらざると雖いえども、而しかも畢ひつ竟きやうなり。一いちに酬しゆう醋さく黜ちつ陟しつと曰いひ、一いちに取しゆ捨しゃ予よ奪だつと曰いひ、一いちに握あく歩ほと曰いひ、一いちに舞ぶ踏とうと曰いひ、一いちに言げん行こうと曰いひ、一いちに言げん動どうと曰いひ、一いちに云うん爲いと曰いひ、則すなわち聲せい主しゆ同おなじからずして其その歸きするや一いちなり。儻もし聲せい主しゆの義ぎを審つまびらにせんと欲ほつせば、須すべから偶くわうする所ところを以もつて之これを推おすべし。條じやう理りを釋たすぬるの法ほうなり。故ゆえに氣きを言いえば則すなわち、氣き物ぶつ、氣き體たい、氣き形けい、氣き質しつ、氣き象しやう、天てん氣き、心しん氣き、氣き色しきの類るい有あり。神しんを言いえば則すなわち、天てん神しん、本ほん神しん、物ぶつ、神しん靈れい、鬼き神しん、神しん人じん、聖せい神しんの類るい有あり。天てんを言いえば則すなわち、天てん地ち、天てん神しん、天てん物ぶつ、天てん人じん、天てん命めいの類るい有あり。全ぜん天てん地ちの規き矩くも亦また東とう西せい南なん北ほくを有うす。半はん天てん地ちの衡こう從じゆうも亦また東とう西せい南なん北ほくを有うす。偶くわうする所ところに由よらざれば、則すなわち將まさに其その主しゆを誤あやます。且かつ一いち氣きも亦また氣き物ぶつを有うす。大だい物ぶつも亦また氣き物ぶつを有うす。而しかして萬ばん物ぶつも各おのの氣き物ぶつを有うす。是こを以もつて、没ぼつして天てんを爲なし、露ろして地ちを爲なすと雖いえども、而しかも没ぼつも亦また天てん地ちなり、露ろも亦また天てん地ちなり、天てんも亦また天てん地ちなり、地ちも亦また天てん地ちなり。往ゆく所ところ皆みな然しかり。故ゆえに聲せい主しゆの間かんは、偶くわうする所ところを推おして、以もつて混こんずる所ところを辨べんずるに在あり。條じやう理り、明あきらかなれば則すなわち其その主しゆに惑まどわず。其その主しゆに惑まどざれば則すなわち杼ちよを曾そう參しんの人ひとを殺ころすに投とうぜず。是こを以もつて、耀やう耀やうを暗あんに比ひすれば則すなわち明めいと曰いひ。之これを焰えん焰えんに比ひすれば則すなわち暗あんと曰いひ。火ひを冥めい冥めいに比ひすれば則すなわち明めいと曰いひ。之これを昭しやう昭しやうに比ひすれば則すなわち暗あんと曰いひ。轉てん持ぢを分わかちて之これを言いえば、轉てんに氣きと曰いひ、持ぢに質しつと曰いひ。持ぢ中ちゆうは之これを分わかてば、無む質しつに氣きと曰いひ、有う質しつに質しつと曰いひ。運うん轉てんを分わかちて之これを言いえば、轉てんに氣きと曰いひ、運うんに象しやうと曰いひ。象しやう中ちゆうは之これを分わかてば、曜やうに象しやうと曰いひ、影えいに氣きと曰いひ。月げつは象しやうなり。或あるいは質しつと曰いひ。水すいは質しつなり。或あるいは氣きと曰いひ。猶なお狗いぬの牛うしより小しやうにして、而しかして鼠ねずみに比ひして大だいと曰いひがごとし。蟻みみずの蛇へびより短たんにして、而しかして蝱ひるに比ひして長ちやうと曰いひがごとし。東とう家かの西にしを呼よんで、西せい家かの東ひがしと爲なすに惑まどうこと勿なかれ。

○人の物に遇うや、必ず其の名を命ず。此れ之を命ずれば、則ち彼れも亦た之を命ず。名の毎に物より多き所なり。然りと雖も、物なる者は、其の體、嚴然たり。人の共に靚て言う所なり。氣なる者は、漠然たり。得て靚る可からず。視ざれば則ち識らず。識らざれば則ち安んぞ得て之を命ぜん。是れ氣の毎に名に乏しき所なり。蓋し條理の剖析は、靚る可からざるが若しと雖も、而も粲然として前に立つ。已に其の粲立する者を獲て、未だ其の名を得ず。竟に我より之を命ず。氣物に没露と曰い、天地に通塞と曰うがごとき是れなり。日に反して影を觀る。水に反して燥を觀る。是れ古人の未だ名を命ぜざる所なり雖も、條理は自から其の主を有す。言わずを欲すと雖も、而も得ず。新名の無きことを得ざる所なり。故に先達は未だ條理を詳かにせず。近きを以て正に混ず。是に於て、方を以て正しく圓に對し、月を以て正しく日に對する者の如きは、是れ未だ對に反比有るを識らざるなり。故に正しく直を掲げて方に換え、影を掲げて月に換う。木なる者は、草と植を相い爲し、鳥獸の動に對す。白なる者は、日の色、以て黒に對す。赤なる者は、白の黒を帯びて、暗の明に接するの青に對す。而して今、木を以て金に對し、赤を以て黒に對するは、是れ條理を錯亂する者なり。倉易の位は、則ち右易左倉なり。赤白の色は、則ち白易赤倉なり。臟腑の分は、則ち腑易臟倉なり。而して世を擧げて之を倒置す。已に天地條理の在る有り。罪を先達に獲ると雖も、而も敢えて従わず。

○伯樂は弟子をして良馬を求め使む。弟子散じて四方に之き、纔に其の高踏善鳴する者を見て、便ち以て駿と爲し、相い共に其の良を争い、久しくして決せず。一人直ちに走って龍種を得て、夫の高踏善鳴を見て顧みず。是れ其の眞を得て、而して不良自から揜わざるなり。世の天地を譚じ、造化を論じ、是非を辨ずる者は、未だ其の眞を得ずして、自ら得る者を以て是と爲す。相い齟て準を立て、人をして之に據ら使む。準を天地に取るに非ざるなり。世の未だ眞龍を見ざる者、意を以て驂騑緑耳と呼ぶ。宜なるかな、駿駑は目を眩ます。夫の五家の如きは亦た配當のみ。而して倉易は則ち對待なり。對待なる者は、天地の條理なり。配當なる者は、人爲の處置なり。天

地は安んぞ彼の配を知らん。是を以て、男女は偶なり。夫婦は配なり。男女を以て夫婦を配す。配の善なる者なり。善と雖も亦た人なり。故に夫婦は轉ずること有り。男女は變ずること無し。天人の別なり。其の善なる者も猶お轉ず。況んや其の不善なる者をや。萬品を彙めて、之を五行に配す。其の言に曰く、東は木なり、西は金なり、東は青なり、西は白なりと。是れ之を聲主を混ずると謂うなり。東を東にし、木を木にし、西を西にし、白を白にす。主當り名稱えて、而して眩する所無し。偶の眞なり。配に由りて妄を病むは、學を以て蔽を得るなり。是の故に、將に事物の然る所を知らんと欲すれば、則ち、須く水を觀て水と爲し、火を觀て火と爲し、幽を觀て幽と爲し、明を觀て明と爲すべし。宜しく對待を以て反觀すべし。宜しく一一に就きて剖析すべし。晉は無似たりと雖も、竊かに茲に見ること有り。其の確乎として固執する者は、微 天地に在ればなり。微 天地に在るとは何ぞや。今 嘗みに語を擧げて人に問うて、天下をして暝焉として夜ならしめる者、廻ち地の影なりと曰わば、人は將に答えて曰く、地上をして灼熱として晝ならしめ、而して其の體を聚める者、廻ち天の日なりと。又た半を擧げて之を問わん。冬にして水の凝りて、而して天より地に降る者、則ち雪と。彼れ將に半を擧げて之に答えん。夏にして火の發し、而して地より天に升る者は、則ち雷と。是に於て我れは半を言いて、而して人は其の半を知る。微 果たして天地に在ればなり。

○微 果たして天地に在ると雖も、而も條理の道は微なり。奚ぞ言ひ易からんや。我は造物者に非ず。詎んぞ能く條理を盡くさん。詎んぞ能く條理を盡くさんなれば、則ち斯の編、豈に恃む可けんや。然りと雖も、條理は則ち天地の準なり。若し得ざる所の者有らば、則ち晉の未だ良馬に遇わざるなり。若し此に人有りて、條理の正を執りて、以て晉の得ざる所を質せば、則ち天地安んぞ晉の不能を護らん。是非なる者は、條理の在る所なり。聖人復た起るとも、豈に之に易うるを得んや。是を以て、是非の道、取捨の行、幽明の途、善惡の性は、門を設け戸を張り、千古了せず。條理、之を講ぜざればなり。條理一たび立ちて、宇宙一匹の文錦と爲る。若く文采燦爛、

雲飛び霞涌き、鸞鳳華卉、鬱乎として目に盈つも、一經一緯、由りて來る所有り。巧婦の意匠、奚んぞ得て逃れん。而して後、火燒の水漬に一に、鱗潜の翼飛に妨げず、川流は敦化して、左右、原に逢うを知る。是れ圖の剖析反合を示す所なり。惟だ其の習する所、目濡れ心染み、窺竅を執りて、而して條理を駁す。所謂、是も亦た一無窮、非も亦た一無窮にして、而して亦た物の偶有る所なり。

○玄語已に艸す。直に其の見る所を説く。重ねて贅語十數萬言を著す。衆説を會して、之を鄙衷に斷ず。贅とは、玄に贅するなり。善く玄を讀む者は、贅を用うる莫し。天地已に在り。而して又た役を筆硯に屬すれば、則ち玄も亦た已に贅す。善く觀察する者は、又た玄を用うる莫し。然りと雖も、觀察の微、條理灼然たり。而して人は今に至りて之を講ぜず。晉を俟つて之を言わしむれば、則ち此の語も亦た廢す可からず。此の語の廢す可からざるは、果たして是か。贅も亦た用うる可し。是を以て、贅は玄に贅すと雖も、事は則ち相い出入す。彝倫の教は、司徒の職、已に設けられしより、其の道に遺漏無し。形骸の議は、素靈の學行われしより、世を擧げて表準と爲す。然りと雖も、彝倫の教は則ち備り、其の條理は則ち遺す。形體の説は則ち有り。其の條理は則ち罔し、是に於て、彝倫の次序、形體の分屬の如きに至りては、則ち玄に略す。而して贅に詳かにす。蓋し夫れ人學びて天人を窮め、目、天地を空すと雖も、然れども亦た斯の躬還つて此に在り。此の故に、斯の人を捨てて、目を彝倫の外に瞠す。曠しいかな。申ねて彝倫を明らかにして、敢語一卷あり。以て畢る。玄語の如きは、則ち言論古人に假ること無し。贅敢は世と酬醋の態を爲す。便ち玄の無き所にして、而して贅敢の設くる所なり。則ち亦た併せ讀まずんばある可からず。蓋し引く所の語は、全き者有り、略する者有り、意を取りて文を換うる者有り、所出を記す者有り、所出を記せざる者有り、我が文中に箱する者有り。其の本志を失する無きが若きは、君子幸いに恕せよ。而して其の古典を引き、衆説を考ふるは、猶お眇視覽行、將に大いに博洽の笑を招かんとす。

○天地洪蕩たり。實に筆硯の盡くす所に非ざるなり。故に此の書を讀むの人は、須く先ず條理の分、統屬の所在を

知るべし。譬えば火を舉げて之を言えは、則ち雷霆隕流、皆な此の屬なるを知り、馬を舉げて之を言えは、則ち羊鹿駝驘、皆な此の屬なるを知るが如し。故に亦た須く必ず知る可し。輕重浮沈は、虚實の間。奇偶多寡は、數中の事。没露有無は、體中の事。長短大小は、形中の事なるを。而して能く統と散とを辨ず。解結聚散、榮枯死生。名は則ち各當たる所有り。事は則ち各統ぶる所有り。其の零碎に至りては、盡く紀極する能わず。是に於て、事物の散ずる者に於て、要は條理を以て統べ、零碎は以て之に屬するあり。且つ天地なる者は、天地なるのみ。觀て之を論ずる者は人なり。故に我を舉げて以て天地に對すれば、擧ぐる所の我は、有意なり。對する所の天地は、無意なり。天人の間は、意の有無のみ。意の有無を混ぜれば、則ち識は皆な窺竅に墜つ。故に言を知るの要は、辨、天人に在り。其の死生通塞は、天なり。殺活予奪は、人なり。人の私よりして、而して天の公を觀る。天の爲よりして、而して人の作を分つ。天成は爲に偶す。人成は敗に偶す。而して人中、死生睡覺するは則ち天なり。運用營爲するは則ち人なり。是れ天人の辨なり。是を以て、悅怨は天に得るの徳なり。仁義は人に在るの道なり。學禮は之を修むの物なり。榮辱は之を成すの事なり。苟くも類に觸れて之を推し、引きて之を伸べずんば、紛若たる事物、言の盡くす可きに非ざるなり。

○人有れば必ず言有り。言有れば必ず名有り。是を以て、我が方の物に名ずるは、固に西土に假ること無し。蓋し漢字の我に入るは、國史以て、應神の朝に創らると爲す。然れども山海經よりして下、論衡、鬱を出だすの事有れば、魏史、書を通ずるの文有り。則ち其の來ること舊し。蓋し和漢の言の異なる。彼は則ち一音に一義を具す。上下主客、以て之を運用す。我の如きは則ち音に義を具せず。數音を合して、而して一義を成す。轉聲變化、以て運用を致す。故に我の已に彼の字を獲り、以て之を用う。其の用は迺ち二なり。一は以て其の字を用う。一は以て其の音を假る。故を以て、我が言を以て彼の字に合す。則ちあめ天に合し、つち地に合す。猶お彼の問、大は摩訶に合し、知慧は般若に合するがごとし。然りと雖も、洪蕩たる霄壤、事物紛若。是に於て、其の譯

は、或いは當り或いは擬す。或いは得て或いは失う。今の博物を務むる者は、將に漢名の正を得て之に従わんとす。業已に漢字を用う。名を漢稱に正さんとする者は、其の志や善し。然りと雖も我に於て漢字を用うるごと、殆ど二千年なり。本邦の稱を爲して、而して改む可からざる者有り。本邦の稱有りと雖も、而も改む可き者有り。我が稱、俗にして彼れ雅なる者有り。彼の稱、俗にして我れ雅なる者有り。誤りて従う可からざる者有り。誤ると雖も通ず可き者有り。亦た彼此共に用う可き者有り。是に於て、或いは彼此能く合す。或いは考合紛紛す。是れ、本邦の漢字を用うるの難なり。蓋し人の博物、實は須く務めて相い得るべし。名は須く主人に従うべし。況んや諸方の物を出だすこと一ならざれば、則ち彼此何ぞ吻合せん。粗ましに一二を擧げて之を例せんに、世に川童と稱する者有り。形は獼猴の如く、水艸の際に出没す。正名を命ずる者は、水虎、魚虎を掲げて標し、又た水蠅を掲げて標す。而して川童を以て標せず。異名を以て、本稱を變ず。正名を欲して、而して反つて其の實を失す。此の間に猿無し。獼猴を呼びて猿と爲す。又た疾風を以て嵐と爲し。烟を以て霞と爲す。洋を以て灘と爲す。海口を以て江と爲す。之を用いざれば、則ち世に通ずること能わざると雖も、而れども文に臨んで則ち取捨せざる可からず。彼れに蠅蝸と稱し、我に長脚蛛と稱する類のごときは、則ち彼れ雅なり。彼れに棘鬣魚と稱し、我に鯛と稱し、平魚と稱する類の如きは、則ち我れ雅なり。何ぞ又た彼れに讓ることあらん。胃を以て甲と爲し、鋤を以て鋤と爲すが如きは、則ち誤りの甚だしき者なり。豈に従うことを得んや。我の鶯、桜、楓の如きは、久しく其の稱を専らにす。我の所謂、鶯なる者は、彼の倉庚に非ず。是に於て、正名は、剖葦と曰い、婆餅焦と曰い、報春鳥と曰う。鶯を以て標すれば則ち定まる。人の見る所を以てすれば、甲乙丙丁、名は常に轉ず。桜、楓皆な然り。夫れ龍なる者は、鱗類なり。而して馬も亦た龍と曰う。斗なる者は、量器なり。而して星も亦た斗と曰う。則ち同名何ぞ嫌せん。今、我の椿と稱する者、國史は海石榴と稱す。海石榴は酉陽雜俎に出づれば、則ち蓋し李唐の傳うる所の名なり。或ひと曰く、今、我の椿は、即ち彼の山茶にして、而して我が邦の山茶

は即ち彼の海紅なりと。然りと雖も、彼の邦の人、我が邦の事を稱すれば、桜と曰い、椿と曰う。亦た我の稱に従う。此の間の杜若は、彼の燕子花を誤れるなり。誤ると雖も、而も本稱を以て古籍を改め難ければ、則ち我の杜若は、迺ち彼の燕子花なり。猶お今の蘭、古の蘭に非ずと雖も、共に蘭と稱す可し。其の名を奪う可からざるがごとし。苟くも其の眞を知らば則ち何ぞ夫の仙陀婆に惑わん。神木、鯉魚、海鼠の類の如きは、我れ自から正稱有り。海雀、稻郎等の如きは、我れ自から雅呼有り。又た彼に薺と曰い、我に野老と曰い、彼に鰕と曰い、我に海老と曰うの類は、諸を漢語和名等の書に收むれば、則ち共に通稱す可し。又た葦鹿の訓に従いて書し、於胡の音を假りて書す。亦た同じく通ず可し。是を以て操觚の間は。消息せざることを能わず。朝廷。考文の治久しく廢し、爾雅の擧、未だ有らざれば、則ち消息して之を分曉にせんと欲すると雖も、業。又た晉の私に出づれば、則ち復た見る者をして鼠璞を混淆にせしめんとす。故に方名を用いて呼ぶ者は、雙黒系を以て之を分つ。且つ條理の道は、未だ講ぜず。見に従いて名を命じ、意に隨いて類を分つ。是に於いて、庶物の品類は、未だ條理に合せず。此の書の業は條理に在り。杜撰なりと雖も、意に舊稱無き者は新たに名を命ず。類を分つは、専ら條理に由る。日の分は、星を以て之に屬し、月の分は、辰を以て名を立す。歳年の別は、周の官注に曰く。朔數に年と曰う。中數に歳と曰う。其の説は分曉なり。故に日の一周天なる者を以て、歳と曰う。月の十二會なる者を以て、年と曰う。艸木なる者は、植の分なり。柔小にして歳を以て榮枯する者を艸と曰う。剛大にして歳を度して生化する者を木と曰う。然りと雖も、艸木なる者は、枝幹の體に正なる者なり。筍蔓なる者は、枝幹の體に變なる者なり。枝幹の體に正なる者は、名して卉樹と曰う。枝幹の體に變なる者は、名して筍蔓と曰う。卉樹は艸木に分る。筍蔓は艸木を具す。類の分たざるを得ざる所なり。蟲は飛走の二を有す。飛に蟲と曰い、走に彘と曰う。菌は剛柔の二を有す。柔に菌と曰い、剛に寓と曰う。陸は鳥獸艸木を有す。而して水は鱗僂藻樹を得る。剛中、植は金石土鹵を有す。而して動は螺甲龜蟹の類を有す。造名は則ち晉の私に出づ。而して類を分つは、則ち條理

の天に由る。質なる者は、雨水土石艸木の類にして、實體有るの稱なり。象なる者は、日月雲煙の類にして、實體無きの稱なり。形なる者は、直圓塊岐の類なり。體なる者は、虚實剛柔の類なり。氣に對して物を擧げ、理に對して故を説く。宇宙天地と、天神本神と、私意に出づるが如しと雖も、實は之を條理に正す。故に聲は同じと雖も、而も主は同じからず。是れ、其の専ら古訓詁に據り難きなり。儒家は、百家と相い區畫する者なり。故に體用を言えば則ち曰く、是れ先王の法言に非ずと。心思を説けば、則ち是れ浮屠氏の事業と。夫れ今、西學入れば、則ち天下の天を譚ずる者、己を捨てて之に従う。眞に護る所有ればなり。火器入れば、則ち天下の武を用うる者は、甘んじて之に習う。利は此れより善きは莫ければなり。諸を天地に徴して而して有らば、則ち芻蕘狂夫も奚んぞ廢せんや。況んや百家をや。假りに水穀鹽蔬の用無くんば、之を牛溲馬溲、敗鼓皮に若かずと謂う可きや。是を以て晉は則ち忌わざるなり。

○書有りて通じ難きは、傳注の起る所なり。周易の十翼、魯史の三傳よりして、而して爾雅訓詁を爲し、夏小正、解通を爲す。後世の注は、皆な訓詁解通なり。獨り裴松之の三國志に於る、劉孝標の世説に於る、輯補を以て注を爲す、亦た一體なり。晉の斯の書に於るや、大なる者は提げ、小なる者は從えば、則ち後世綱目の設、幾し。然りと雖も其の細書する者は、或いは本文の言わざる所に出し、或いは本文の既に言う所に收む。出入先後は、復た前例に規規たらず。讀者は須く融して之を通ずべし。

○伏して天地の化育を觀るに、水火は性を異にすと雖も、而も並育せられて相い害せず。聖人の天下を治むるは、能く衆情を容れて、而して模範の中に陶冶す。惟だ周禮を讀みて、而して後、聖人の心の天地の若くなるを知る。蓋し聖人の心は、愚を愍み異を容れ、賢愚利鈍、各其の情を伸ばし、各おの其の力を竭し、各其の處を得るに在るなり。先王の道衰え、諸士口舌を以て、天下の治を説き、己の見る所を以て、己の非とする所を排す。門戸を互いに設け、是非各張る。之に加うるに佛老を以てす。道は政と離る。其の相い是非する者を以て天下

を治めんとす。是に於て。政に従う者も、亦た此れを以て心と爲す。水を以て火を惡み、裘を以て葛を忌み、赤子を分ちて、而して諸を愛外に置く。大いに周公の天下を治むるの設に非ず。而して天地化育の道と異なるなり。周禮の六官は、治有り、教有り、禮有り、政有り、刑有り、職有り、將に備えて之を用い、人情を其の中に疏せんとす。然らずんば、則ち占めて夢を贈り、讎して疫を毆ち、人死すれば則ち復し、年、早すれば則ち雩し、大喪には則ち方相氏、壙に入りて方良を毆ち、日食には則ち鼓を撃ちて日を救うが如し。何爲れぞ兒戲なる。此を以て之を治め、聰明を以て天下に先んぜず。後世の撰と異なるなり。後世、先王の道を以て、儒と曰う。然れども、儒者は、周禮九兩の一流れて學者の稱と爲り、老墨申韓、互いに興り、相い杭し相い攻め、議論を以て諸家に勝たんと欲す。勢い先王の道と異ならざるを得ず。孔子は亂世に栖栖として、其の志、將に東周を成さんとす。轍、天下を環りて、之を敢えて宗とする者莫し。終に先王の法を取り、修して之を傳う。是れ乃ち孔子なり。孟子は戰國縱横の間に起きて、霸を抑え王を揚ぐ。亦た其の新意なり。君臣の義を論ずるに至りては、則ち孔子と合せず。莊子は放浪と雖も、而も殷湯周武を論ずるに至りては、則ち孟子の下に出でざれば、則ち諸家と雖も、而も廢す可からざるなり。夫れ天下の善惡利鈍に擾擾たるは、猶お高きに登りて雲霧烟霞、山澤江湖、竹樹鳥獸の雜然たるものを望むがごとし。是の天、能く此の雜然たる者を容る。此の君、能く此の雜然たる者を保す。此の故に、周禮より之を觀れば、則ち老墨申韓も、亦た儒なり。道を分つよりして之を觀れば、則ち儒者は、先王の法服を服し、先王の法言を唱える者なり。是を以て儒者の道は善なりと雖も而も九兩の一に出でず。是に於て、各、其の徳とする所を徳とし、各、其の道とする所を道とし、以て分界を爲す。分界一たび立ちて其の地狭し。狭ければ争う。争えば鬪う。鬪えば則ち其の非を相い見て、其の是を相い知らず。是非中らざれば、以て相い服するに足らず。愈いよ攻めて愈いよ叛き、愈いよ廣めて愈いよ狭し。其の同じくする所を以て、而して道に由るは、天地の心なり。否らざれば則ち己に於るなり。其の可を銜いて、而して其の不可を護す。人に於るや、其の

可を遺して、而して其の不可を拾う。擾擾たる生民は、我と同胞なり。奚んぞ區域を相い争うの中に爲さん。夫れ善なる者は、人の悦ぶ所なり。惡なる者は、人の怨む所なり。是は人の榮とする所なり。非は人の辱とする所なり。諸を四方に推し、諸を古今に建てて、公然たる者なり。今、夫れ善を爲す者は。將に人の不善を治めんとす。將に人の不善を治めんとして、而して行を不善を絶つことに危うくす。不善は路を善に入るに失して、竟に激して害す。其の名は則ち美なり。其の實は則ち損なり。孰か其の咎を執らん。晉は寒郷の一農なり。幸いに日月の休明に値い、竊かに聖澤の洪蕩を窺う。徳は天地と並び行われ、物は各其の處を得る。衆の悦怨する所にして、而して善惡を知り、衆の榮辱する所にして、而して是非を考う。賢と無く愚と無く、同と無く異と無く、四海兄弟にして、而して大父の膝上に教育せらる。伏して惟んみるに、晉は則ち王者の民。竊かに天地に窺うこと有り。亦た相い與に樂しんで、優遊して歳を卒う。其の門戸を開く者にして入り、其の門戸を閉ずる者にして入らず。各好尚を大同の中に置く。故に各家の學を守つて、専ら一門に據ること能わず。我れ棄てて而して彼れ之を拾い、我れ非として而して彼れ之を是とす。大同に非ざるなり。故に之を是非するに天地を以てし、之を取捨するに天地を以てす。言いて失する有らば、晉の天地に肖ざるなり。言いて得る有らば、晉の天地と肖るなり。

○宝曆癸酉の歲。晉年三十一にして始めて此の艸有り。繼いで贅敢の二語有り。贅は宝曆丙子に始まり。癸未に至りて、八たび年を踰え、十たび稿を換えて今の本に至る。凡そ七冊なり。敢は宝曆庚辰に始まり。癸未に至りて、四たび年を踰え、四たび稿を換ゆ。今の本に至りて、一冊と爲す。今茲、門人之を梓に上す。此の語は癸酉に始まり、明和乙酉に至りて、換稿十五たび。竟に大いに憤憤たるを覺え、盡く舊稿を棄て、新たに艸を起す。四年を越えて戊子に至り、三たび艸を換え、稍や安きが若し。休すること一年。再び之を思うに、天地に於て、大いに合せず。庚寅の冬、又た舊稿を棄てて、此の稿を起す。又た六年を経て、今茲乙未、五たび換えて纔に此

の稿こうを得えたり。四冊し七本さつしちほん、例旨れいしを併あわせて凡およそ八本はちほんなり。歴年れきねん二十にじゅう三さん。換稿かんこうも亦また二十にじゅう三さん。物ぶつは大だいにして事じは衆おほし。
 犬馬けんばの齒よわい、既すでに半百はんびやくを過すぐ。鬢髮びんぱつ皤皤はは、繼ついで心胸しんきょうの病やまいを以もつてす。知しらず天てんは之これに年としを假かし、將まさに其その業ぎょうを卒おわ
 しめんとするか。將まさに其その志こころざしを奪うばわんとするか。是こゝに於おいてか感無かんなきこと能あたわず。書しょして以もつて佗日たじつを踈まつ。安あん
 永四年えいよ ねんたんど端午しる識しす。

げんご
 れいし
 玄語例旨